

こころ

2020 8

— 平和特集号 —

通巻第 589 号
2020 年 8 月 2 日 発行 (毎月 1 回 発行)
〒 106-0031 東京都港区西麻布 3-21-6
Phone (03) 3408 - 1500
FAX (03) 3408 - 2575
<http://www.azabu-catholic.jp>

カトリック麻布教会
こころ編集部



ミニトマト (元気です)



ナス (まだこれから)



マクワウリ
(シマシマがなかなかいいですね)

きゅうり
(これからたくさん採れるはず)



ニガウリ



6月号より掲載している、神父さまが撮影された野菜の写真です。こんなに大きくなりました！写真キャプションは神父様からのコメントです。お楽しみください。

平和を願うところを養う

主任司祭 ルカ 江部 純一

毎年8月はカトリック平和旬間であるが、今年は「平和を願うミサ」も非公開となり（8月8日（土）18時 インターネット配信）、諸行事も中止となった。残念なことであるが皆さんには通常にもまして祈りをともにしていただきたいと願う。

広島、長崎で出される平和宣言は毎年、TVや新聞で確かめることにしている。特に広島の子ども代表の平和への誓いはできる限りTV中継で同時に聴くようにしている。児童の声がいつもところに響き、考えさせられるからである。

○昨年の松井一実・広島市長：

「不寛容はそれ自体が暴力の一形態であり、真の民主的精神の成長を妨げるものです」（注：ガンジーの言葉）現状に背を向けることなく、平和で持続可能な世界を実現していくためには、私たち一人一人が立場や主張の違いを互いに乗り越え、理想を目指し共に努力するという「寛容」の心を持たなければなりません。

○田上富久・長崎市長の言葉：

「原爆は「人の手」によってつくられ、「人の上」に落とされました。だからこそ「人の意志」によって、無くすことができます。そして、その意志が生まれる場所は、間違いなく私たち一人ひとりの心の中です。」「人の痛みがわかることの大切さを子どもたちに伝え続けましょう。それは子どもたちの心に平和の種を植えることとなります。平和のためにできることはたくさんあります。あきらめずに、そして無関心にならずに、地道に「平和の文化」を育て続けましょう。そして、核兵器はいらない、と声を上げましょう。それは、小さな私たち一人ひとりにできる大きな役割だと思います。」

○広島の子ども代表の平和への誓い：

「二度と戦争をおこさない未来にするために。国や文化や歴史、違いはたくさんあるけれど、たいせつなもの、大切な人を思う気持ちは同じです。みんなの「大切」を守りたい。「ありがとう」や「ごめんね」の言葉で認め合い許し合うこと、寄り添い、助け合うこと、相手を知り、違いを理解しようと努力することは、私たち子どもにもできることです。大好きな広島に学ぶ私たちは、互いに思いを伝え合い、相手の立場に立って考えます。」

*

今年は新型コロナウイルスの流行で、各地の夏祭りも多くが中止となっている。昨今は全国から100万人をも越える人が見物に訪れる長岡花火は、戦前から花火打ち上げはあったようであるが「長岡まつり」として花火が打ち上げられるのには、空襲で街が焼かれ多くの死傷者が出た慰霊・追悼の意味が込められている。祭り自体が戦死者の追悼である。花火大会の初めには慰霊の花火が打ち上げられ、黙祷を献げる。昔は灯籠流しも行われていた。名物花火となった「フェニックス」は、2004年10月に起きた新潟県中越地震の被災者の慰霊と復興を願ってはじめられたものである。戦争被災者と災害被災者の慰霊・追悼・復興を願って「不死鳥」（フェニックス）と名付けられたのである。

*

キリスト者にあっては特に「平和を願うところ」は一年中、どんな状況にあっても欠かしてはならないが、このことはまた普段のあらゆる出来事を通して、いつもわたしたちの身の回りに「平和を願うところ」を養っていく機会が与えられているということでもある。過去の出来事を思い起こすとき、現在の困難

な状況にあるとき、今起こっている出来事の意味を過去から尋ねようとする。

ユダ王国滅亡期に活動した預言者エレミヤ（前626～586年）は、バビロニアのネブカドネツアルによって都エルサレムが破壊されると預言しただけでなく、実際にその出来事が起こった後、彼らを歓迎した。ネブカドネツアルはユダを懲らしめるための神の道具である。また、当時行われていた神殿祭儀や祭司批判を行うなかで、主の声に聞き従い、内面を見つめ「新しい契約」を民の心に記される時が来る、と説いたのである（「エレミヤ書」）。預言者エレミヤのこうした態度は、周囲の者たちをして彼を裏切り者と呼ばせ、牢獄の泥水につけられ、最後はエジプトに連行され殺害されることになる。

なぜ外国から占領され、悲惨な捕囚をよしとするのか。エレミヤは主のことばを述べる。「バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである」（「エレミヤ書」29,10-11）。

「将来」と訳された語は、「背中・背後」をも意味し、同時に「未来」をも意味する。時の流れに対するヘブライ人の姿勢は我々とは逆である。我々は過去に背を向けて未来を見つめているが、ヘブライ人は未来に背を向け過去を見つめている」（雨宮慧『旧約聖書のこころ』女子パウロ会1989年・要約して引用）。

バビロン捕囚はイスラエルの滅びのためではない。イスラエルの未来は救いなのだという。この時間意識・歴史意識は重大である。「主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい」（「申命記」8,2）。なぜ自分た

ちにこのような苦しみがあるのか、なぜ過去の辛い出来事をいつまでも思い起こすのか。それは彼らを導き、そして時に神ご自身が民の行動を見てあわれむ姿があったからにほかならない。「わたしは彼に対立して語るたびに、それでもなお彼のことを思い起こす。まことに、わたしのはらわたは彼を切望し、わたしは彼を憐れまずにはいられない」（「エレミヤ書」31,20 フランシスコ会訳）。過去を自分の目の前に置く。そして神の行われたわざを見ようとする。だから、今起こっている苦しみや辛酸の意味を探ろうとする。歴史を過去のものとしてせず、現在・未来に向けての大きな導き手として意識し、それを語り継いでいく。この伝統と姿勢こそがエレミヤを動かした。

*

「歴史とは、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話である」とは歴史学者の有名なことばである（E.H.カー『歴史とは何か』岩波新書）。「平和を願うところ」を深めるためには自国の辿った歴史を振り返る。時にそれは大きな過ちであり、他者を傷つけ自分もまたところを痛めた歴史でもある。それをきちんと、冷静に、事実をできる限り客観的に、一つのもの見方に拘泥することなく、やわらかいところをもって見つめ、自分（たち）に都合が悪い出来事であったとしても受けとめていかなければならない。なぜなら、そこには一人ひとりの生きた人間がいるからである。相手がいるからである。人と人との関わりなしに人間の歴史はあり得ない。同じ痛み、苦しみ、悩み、喜び、をともにしているからである。昨年の長崎市長の言葉にある通り「人の痛みが分かることの大切さ」を失わず、子どもたちにも伝え、思いをともにしていくことが今ほど要請されている時もないであろう。

*

日本の司教団は2016年、『今こそ原発の廃

■平和特集 1

止を『日本のカトリック教会の問いかけ』を公にした。持続可能な地球社会を目指していくことも「平和を求め続けるころ」に通じる。人種差別をなくし、すべての人が平等・対等に生きていくことができる社会を作り上げていくことも平和のためになすべきことである。人に対して社会に対して無関心であることを止めることも、互いに支援し助け合うことを実行することも平和につながる。

「平和」を祈るとは、いま生きているわたしたち一人ひとりの普段の生活、当たり前のよ

うに行われている日常生活が奪い取られないことでもある。谷川俊太郎さんの「生きる」という詩を思い出していただければいい。そのために、いま、一人ひとりが、日常の出来事の意味を深め、出会いを大切に生きること。日常が奪い去られることがないように、努めて意識を持ち続けること。今まで経験したことがないような状況の真っ只中にある社会を見つめ、新しい生き方を模索しながらも、神の働きを見いだしていくこと。



フェニックス (不死鳥)



「火の鳥」とわたしは呼んでいます。



次から次に上げられる尺玉 華麗で豪壮というべきか

赦しから始まる平和

デ・ルカ・レンゾ（イエズス会日本管区 管区長）

殆どの人は平和を望むのに、人類の歴史を見れば、争いが絶える時期がなかった。人間の深い望みがあっても、それに相応しい行いが無い結果とでも言えよう。これからも全く争いが無い時代が来ないにしても、現代より平和的な世界を期待したい。その関係で失敗例がたくさんある中、日本の歴史に、そのより平和な世界を作るためのヒントがあるに違いない。一例として、日本キリシタンの姿勢を紹介したい。日本で迫害が激しくなった時、キリシタンたちが殉教する準備を進めていた。手書きの形で出回ったパンフレット、『マルチリオの心得』（1620年頃）の最後に、以下の箇所がある。

死刑を行う役人やそれを決める責任者に対しての危害や罰を一切望んではならない。逆に、彼らの行いはあなたを天国に導かれるので、彼らは真理の道に出会うように祈りなさい。拷問を受けている間、主の受難、冠を持ってあなたを待っている聖マリア、聖人と天使たちのことを思うようにしなさい。

これを見れば、徹底した平和主義、福音的に言えば「悪に善で応える」教えである。しかし、それは人間の自然な態度ではないので、どうすればそれに近づけるかという問いが出る。相手が正しいと思って自分にとって禍になることがあろう。江戸時代のある者がキリシタンを迫害することが正しいと思ったかも知れない。それでも、長い拷問に掛け続けて背教させる目的での迫害に賛成する人は稀だったと思う。一般の国民がそれを望まなかったにもかかわらず、キリシタンたちが立ち上がって役人に対する暴力を振るわなかった事実が残る。二十六聖人が長崎に向かって

歩いている間、僧侶やキリシタン以外の人からもてなしを受けた記録が残され、その他の殉教の場面でも殉教者を尊敬する姿勢が多く見られる。

キリシタンを排除することは国民の感覚ではなかったし、背教をすれば迫害を免れることを知っていたにもかかわらず、多くのキリシタンは、無抵抗の殉教を選んだ。これこそ説明しがたい歴史である。

私の解釈では、その行為の根底に「赦し」があって初めて成り立つ歴史である。条件、つまり、「相手が正しいければ受け入れる」、「自分が納得すれば従う」といった態度では平和は生まれない。「停戦」ぐらいは生まれるかも知れないが、それは本来の平和ではない。

相手（人、文化、国）が自分と違う存在である限り、摩擦があって当然なので、その摩擦を争いに展開するか、相違を認め合って互いに豊かになる方向に変わるかが平和の分かれ目だと思う。どちらが正しいかを決めてから何かをしようと思えば、両方が自分（国、文化、）こそ正しいという主張が繰り返されるのみである。それに対して、キリシタンたちが行動をもって示してくれた道は明白である。それは正しさを問わず、相手を赦して初めて平和が生まれる教えである。相手も自分も罪人であり、両方とも「赦しを必要とする」者である確信とも言える。言うまでもなく、「悪人にも善人にも太陽を昇らせる」（Mt.5:45）御父の模範に従うことである。

私たち皆が、そのような平和をもたらず者になる召命を受けているので、この時期こそ先輩たちの模範に従ってその恵みを祈りたい。

丘の上の証人 —ジョー・オダネルの体験から—

イグナチオ・デ・ロヨラ 高祖 敏明
(イエズス会司祭、聖心女子大学学長)

原爆炸裂後の長崎で撮られた「焼き場に立つ少年」の写真は、よく知られている。長崎市は2007年8月に寄贈を受け、原爆資料館に常時掲げてきた。先年、教皇フランシスコがある書の中のこの写真に目を留め、「戦争がもたらすもの」との言葉に自らのサインも付して、全世界に向けて配布されたのも記憶に新しい。

この情景を写真に収めたのは、米国の従軍カメラマン、ジョー・オダネル。彼は占領軍の公式記録員として、広島、長崎などの都市の空爆による被災状況を記録する任務を帯び、1945年9月に佐世保に上陸した。それからの7か月間、公式記録を残す一方、それとは別に、私用カメラを使って敗戦直後の日本の姿をフィルムに焼き付けた。

46年3月、彼は任務を終えて帰国し除隊するが、脳裏に焼き付いた悲惨な辛い記憶を封印するため、300枚にも及ぶ写真とネガをトランクに封じ込め、鍵をかけて屋根裏にしまい込んだのであった。

ほどなく、社会的にはホワイトハウス付きのカメラマンとして活躍。トルーマン大統領に解任されたマッカーサー元帥、人種が融和する夢を語ったキング牧師、暗殺されたケネディ大統領の血に染まったピンクのスーツ姿のジャクリーヌ夫人など、歴史的瞬間を捕らえて世界に発信したりした。

ところが体調不良に悩むようになり、手術と治療のため入院を繰り返す。そして、この症状は、カメラを手に広島や長崎を歩き回ったことによる、放射能の二次感染が原因との診断を受ける。療養の成果で身体は以前より楽になったものの、歩き回った日々の記憶は、薄れるどころか、ますます鮮明に意識

に上り、今度はこれに苦しむようになる。そうした時、彼は思った。「もう逃げるはよそう。自分の気持ちに正直になろう」と。帰国からすでに半世紀近くも経っていた。

彼はかのトランクの鍵を開き、改めて1葉1葉に見入りながら、湧き上がる想いを多くの人と共有することを思いつく。写真展の開催である。彼の想いを聴き、テネシー州ナッシュビルでの写真展を見たジェファニー・オールドリッチは、自分の体験したことをまとめるよう彼に勧め、写真展を続け、本も書くよう励ました。写真を見ながら記憶から紡ぎ出して彼が語る話を彼女が書き留める一方、彼女は、より鮮明な情景が表現されるよう、より正確な言葉を求めて問いかけていく。長年、記憶の底に封じ込め、忘れていた事実が思い浮かんでくるにつれて、彼は悪夢を見るような辛さに夜も眠れなくなる。

しかし、対話を続けた彼は記している。「不思議なことに、写真を繰り返し見ることで、体験を思い出しながら語ることで、私は少しずつ癒されていきました。」そして、「1945年の夏、きのご雲の下で何が起きたのか？その恐ろしい事実を伝えていくのが私の使命だと思うようになった」(後掲書、111ページ)と。

こうして「ジョー・オダネル写真展 トランクの中の日本」が日米両国内ばかりでなく、ヨーロッパ各地でも開催されていく。ところが、大きな壁もあった。ワシントンDCの Smithsonian 博物館を会場にした写真展が、急遽キャンセルされたのである。それは1995年のことであった。同年夏から半年の開催予定で、展示の準備もほぼ出来上がっていたのに、退役軍人らからの圧力を受けて写真展は中止。飾られたのは、広島に原爆を落とした

飛行機エノラ・ゲイのみであった。日本のマスコミも大きく取り上げた事件であった。

そうした最中、念願の書の刊行が叶う。日本語訳版『トランクの中の日本 米従軍カメラマンの非公式記録 JAPAN 1945, IMAGES FROM THE TRUNK』(小学館、1995年初版。翻訳は平岡豊子)である。

本書には56葉の写真が並べられ、それぞれに写真展でも使われたキャプションが日本語と英語とで付されている。加えて多くの写真には、それをカメラに収めた時の気持ち、収めた場の情景を、ジョーが記憶から絞り出し、ジェファニーが聞き書きした説明文が加えられている。その中の1葉が「焼き場に立つ少年」であるが、同時に「国破れて」なお、いじらしく助け合って生きていた庶民や子供たちの姿も少なからず登場する。

だが、冒頭の写真が、佐世保に上陸する前日の朝早く、船上で捧げられたミサの光景であることは、あまり知られていない。上陸からの時間的順序に従って写真を並べているにしても、著者たちのこの写真集に込めた思いが伝わってくる。9月の暑さの厳しい朝であったと見え、上半身裸で司祭の話に耳を傾けている兵員も多い。キャプションには、「カソリックもプロテスタントも一緒に、侵略者としてではなく占領軍として上陸できることに感謝した」(10ページ)とある。

著者たちの思いと願いは、最後の3葉がよく語っている。その舞台は、無残な姿をさらす丘の上の浦上天主堂である(102~107ページ)。崩れやすい瓦礫の坂道を、足元を気にしながら上り詰めると、「天主堂の丸屋根は、まるで眠っている巨人のように、爆撃で転げ落ちたまま廃墟の中に横たわっていた。」彼は、沈む夕日に廃墟となった天主堂のシルエットを見て、カルバリの丘でのキリストのはりつけを思い起したと記す。

さらに廃墟に近づいて行って、コンクリート製の彫像の頭が街を見下ろすように台の上に置かれているのに気づく。その傍らに立ち、そっと身を寄せて語り掛けるように彼はつぶやく。「何を見ていらっしゃるんです?」

「爆心地が目の前に広がっていた。一瞬息が詰まった…見渡す限り人々の営みの形跡はかき消され、瓦礫が地面をおおいつくしていた。私はたったひとりでここに立つ。まるで宇宙でたったひとりの生き残りであるかのように…私は体を失った彫像を見つめる。口はからからに乾き、目には涙がにじむ。やっとの思いでつぶやいた。『神様、私たちはなんてひどいことをしてしまったのでしょうか』と」(104ページ)。

この彫像を前面に、尖塔部分が吹き飛ばされた天主堂を背景に収めた最後の写真。「無言の証人」と題されている(106~107ページ)。



アサガオとユウガオ(正確にはヨルガオのようですが、アサガオと蔓が一緒になり、どう絡まっているのかわかりません)

新型コロナウイルス感染症流行下におけるニューノーマル始まる 広報部会

5月25日に緊急事態宣言が解除され、様々な制限はあるものの、6月21日から公開ミサが始まっている。

麻布教会では、しばらくの間、月2回ミサに与えるようにするために、以下のように地区ごとに分けて集まっていた。

第1日曜日：A B地区

第2日曜日：B C地区

第3日曜日：C D地区

第4日曜日：D A地区

その他の注意事項は以下の通り。

- ①必ずマスクを持参し着用してください。小さいお子様にも必ず着用をお願いします。
- ②ミサに参加する前に、十分に手洗い、入口でのアルコール消毒を行ってください。
- ③席は、しるしのあるところに座ってください。一列に3人、右左で6人、一列置きに互い違いに着席します。
- ④献金はミサが終わった後、聖堂後方(特別献金は聖堂の外)の献金箱にお入れ下さい。
- ⑤当日、地区委員より朗読奉仕、共同祈願をお願いされた場合には、お引き受け下さいますようお願いいたします。
- ⑥公共交通機関利用の感染リスクを避けるために、9時30分ミサも7時ミサと同様、自動車を駐車しても結構です。
- ⑦75歳以上の方、持病のある方(基礎疾患)は引き続きご自宅でお祈りください。主日のミサに与る義務は免除されています。

金曜日10時からのミサは75歳以上の方々も参加できる。

また、公開ミサへの参加者には「ミサ参加者カード」への記入をお願いしている。氏名、住所、電話番号、e-mail、座席番号を記

入していただく。回収後、鍵付きの戸棚に保管し、2週間後に廃棄する。また、7月24日(金)より、検温をお願いしカードに体温を記載していただくことにした。検温結果が37.5℃以上の方はミサには参加できない。

緊急事態宣言後、低く抑えられていた感染者数が7月に入ってからまた増加し、首都圏や大阪、福岡などでは過去最多の感染者数を記録するなど予断を許さない状況である。その中で、国の観光支援事業「GoToトラベル」(新型コロナウイルスで打撃を受けた観光業界を政府が支援する事業)が7月22日から始まった。東京都を除いた46道府県で行われている。一方、東京都からは7月22日からの4連休については、不要不急の外出はできるだけ控えるよう呼びかけがあった。特に高齢の方、基礎疾患のある方は注意をするようにとのことである。

世界では、アメリカ、ブラジル、インド、ロシアでの感染者数が増えており、外務省の海外安全情報の感染症危険レベルはほぼ全域でレベル3(渡航は止めてください)である。

多くの情報が得られているような錯覚を起しがちであるが、周りに流されないように常に識別ができるよう聖霊の恵みを願いたい。

聖母の被昇天と8月第5日曜のミサ

- 8月15日(土)聖母の被昇天ミサ
10時：地区は問わない。
- 第5日曜日8月30日(日)のミサは7時：A、C地区 9時半：B、D地区
なお、両日とも75歳以上の方はご自宅でお祈りください。

<お知らせ>

合同堅信式中止

宣教協力体司祭連絡会で協議の結果、新型コロナウイルス感染の現状に鑑み、今年10月に予定されていた合同堅信式は中止となりました。来年麻布教会で行う予定です。

<東京教区からのお知らせ>

東京教区災害対応チームによる「コロナ対応 支援プラットフォーム」ブログ

東京教区災害対応チームは、コロナ禍の中で諸問題に対して活動している団体をご紹介します、必要な支援を届けるための「コロナ対応支援プラットフォーム」ブログを設置しています。このブログは「支援を必要とする団体(グループ)」などからの情報を掲載し、そのニーズに応える物資や人材を募り、効果的に諸問題に対応する支援活動をサポートすることを目的としています。東京教区の小教区内外で、現在コロナ対応の支援活動をしている、あるいはこれから活動を始めようとしているグループで、物資や人材の募集をご希望の方はぜひご活用ください。「コロナ対応 支援プラットフォーム」ブログ URL は <http://catholicfad.jugem.jp/> です。

2020年度の平和旬間のミサ、行事について(東京教区ホームページから)

平和を願うミサ

日時：8月8日(土) 18:00～

司式：菊地功大司教

※ミサは非公開で行われますが、YouTubeでライブ映像配信いたします。

●ミサ以外の講演会、平和巡礼ウォーク、祈りのリレー等は、新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、すべて中止といたします。ご理解の程よろしく願いいたします。

<訂正事項>

7月号表紙の右上の写真のキャプションが間違っておりました。ここに謹んでお詫び申し上げますと共に、下記のように、訂正いたします。

ユウガオ(左)とアサガオ(右)



新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、今後の見通しが立たないため、今号もスケジュールの掲載はいたしません。

(編集担当 高岡瑛恵)